

岩田 幸治

【はじめに】

日本の青年会議所は、戦後間もない1949年の混沌とした時代のなか、荒廃したまちから日本の戦後復興を志した青年たちによって始まりました。

札幌青年会議所はその2年後に、全国18番目に設立されて以来歴史を重ね、近年では2015年に2030年の理想のまちの姿を市民と共有したサッポロビジョンを策定し、2020年に札幌の新たな魅力の創出により札幌のまちの未来を創造することを目指し、公益社団法人日本青年会議所 第69回全国大会北海道札幌大会の主管を担う等、明るい未来図を描いてきました。

しかし、2020年初頭から世界中に蔓延した感染症が長く暗い影を落とし、社会にも経済にも深刻な影響を与えました。制限された生活や停滞した経済から立ち直ろうとする今の状況は、新日本の再建を我々青年の仕事であるとし、日本の苦難を打開するため経済を充実させる任務の大半を負っている我々青年は、あらゆる機会をとらえて互いに団結し自らの修養に努めなければならないと掲げた青年会議所の黎明期と重なります。

【地域のために今できること】

新型コロナウイルスの蔓延は人びとの安心を脅かし、未曾有の経済的損害をもたらしてきました。そして今も、私たちが愛する札幌は安全と経済の両立を強いられる厳しい状況に置かれ続けています。ワクチンの接種が進みつつある現状でも、人びとが失った機会に折り合いをつけることや経済的損失を取り戻すことは容易ではありません。私たちはこのまちに何ができるでしょうか。今こそ、愛する地域への理解を深め、青年経済人としての視点と発想で私たち独自の地域活性化の姿を考え、労を惜しまずに実行するときです。

近代日本経済の父や社会企業家の先駆者といわれる渋沢栄一は、「真に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるようであってはならぬ。」と説きました。「よく散ずる」とは、派手に散財せよという意味ではありません。お金を集め利益を出すことと同時に、企業の成長や社会の充実のために正しく積極的にお金を使っていくことが地域の発展につながるのです。

地域のことを知り、地域への愛をもって、経済を循環させ、市民とともに明るい未来を創造することが、私たちの責務です。

【全ての市民が活躍する環境】

日本国内においては少子化が進行し、1970年代から合計特殊出生率は減少し続けています。特に札幌の合計特殊出生率は全国平均を大きく下回り、希望出生率をも満たせていない状況です。こうした現象は、価値観の多様化による人びとのライフスタイルの変化に一因があるとされますが、その一方では他国と比べて女性の社会進出の状況が低水準に留まっているといえる日本において、札幌は人口における女性割合が高いにもかかわらず、女性の正規雇用者割合が非常に低い都市となっています。

今後更に進む価値観の多様化に対応しつつ、持続可能な経済と社会の仕組みを整備していくためには、全ての市民が仕事と子育てを分担しそれぞれのライフスタイルにあわせたワーク・ライフ・バランスを選択することがあたり前の社会を整備しなければなりません。年齢、性別、国籍の区別なく誰もが安心して子供を育てることができ、ライフスタイルと子育てのあり方について自由な考え方を持つことが、全ての市民が活躍するまちの未来につながるのです。

私たちは、伝統的な働き方と役割分担から、社会構造ごと転換していく歴史的な岐路に立たされています。

【まちの交通における革新】

本年は札幌で冬季五輪が開催されてから50年の節目となります。前回開催時は地下鉄、地下街、幹線道路、競技施設といったインフラが整備され、市民の生活は一変しました。しかし、インフラ整備を原動力に経済成長していった時代から、多様な価値観を包摂して持続可能性を求める時代となった現代は、新たな視点で価値を創造しなければ国際都市としての成長はあり得ません。

歴史を振り返ると、人類はこれまでの産業革命においては石炭、石油、電力による移動の革新や情報技術の革新を生み出し、日々の生活において距離的、時間的なロスを大幅に短縮してきました。そして現代、新たにフィジカル空間とサイバー空間が融合化されて、更なる革新が生み出されようとしています。

札幌は市民の交通における自家用車への依存度が高く、環境的にも経済効率にも問題を抱えています。まちの交通がデジタルに連動してシームレスになり、所有からサービスへ変化することで、バリアフリーで環境にやさしく、更に効率的な経済活動を促す、そんな最先端のまちづくりを青年経済人の視点で描くことが重要です。

【札幌というまちの持続可能性】

経済成長の一方では環境汚染への問題意識が、1972年のローマクラブ『成長の限界』を起点とし、近年では国連サミットでのSDGs採択、COPにおけるパリ協定の採択等によって、世界的に急速な広がりを見せています。日本では、2020年に『2050年カーボンニュートラル』を掲げて、脱炭素社会の実現を目指すと宣言しました。

道内の様々な自治体が風力、太陽光、バイオガスといった再生可能エネルギーや資源の再利用についての取り組みを行い、地域独自の経済と持続可能な社会の両立に向けた努力をしているなか、冬期間の暖房や融雪等といったCO²排出問題を抱える札幌の理想的なエネルギーのあり方を再考する必要があります。

今から僅か8年後の2030年はSDGsの達成目標年であり、札幌市が招致を目指す冬季五輪の開催年度でもあります。現在は国際的な交流人口が激減し、五輪開催の大義が問われていても、札幌を世界に誇れる都市として世界中に示すための潜在的資源と時機は、いまだ途絶えた訳ではありません。その時に備えて、環境と経済が両立する健全な社会を実現することが重要です。

【共感が促す組織の成長】

ピーク時には462名の正会員を擁した札幌青年会議所でしたが、時代とともに会員数は減少し、2010年代前半には一度増加傾向にあったものの、近年では200人未満の状態が続いています。こうした状況を打破するために、私たちは広く門戸を広げて地域の人的ネットワークをつなげてきました。

私たちの活動の効果を最大化するには、多種多様な会員による様々な考え方を、会員の修練・奉仕・友情に取り入れていかなければなりません。そのためには、一人でも多くのまだ知りえぬ青年経済人に同じ志を抱いていただくことが必要不可欠です。

価値観が多様化していく現代だからこそ、青年会議所の創始の精神や三信条という不変の価値をいま一度磨き上げ、共感を得ていくことが重要です。私たちの活動の本質を広く社会に理解していただくとともに、礼儀礼節を重んじ、謙虚で模範的な態度や言動を貫くことも、社会とつながるなかで組織と会員個人の価値を高めることにつながるのです。

【戦略的な情報発信】

私たちが社会変革のリーダーとして市民とともに運動を進めたり、そのリーダー自体を育成したり、自ら創出した価値を社会に伝えるためには、広く情報を発信して共感を獲得しなければなりません。また、組織の内部で主体的に情報が共有されることによって運動の効果は高まり、個人の能力向上にもつながり、組織の価値は高まります。

情報技術の進歩により、誰もがいつでもどこでも情報に触れ、情報を選択できるようになった現代では、組織としても個人としても発信手法や媒体をより広く探究し、伝え方の質を向上させることが重要です。そのために、最新の情報媒体を利用して効果を検証することに加え、伝統的なメディアも含めて私たちの活動ごとに最適な情報発信の手法を選択しなければなりません。こうした膨大な選択肢の組み合わせから最適解を導くには、自力での発信ということに拘らず、市民や専門機関との人脈を築き、時代に即した情報発信のためのつながりを構築しなければなりません。

【責任ある管理と未来への投資】

私たちの活動は会員による会費と社会からの信用によって成り立っており、その用途については責任を持たなければなりません。事業の性質や目的について共感していただき、社会から資金を支援していただければ、その運動から生まれる価値を必ず社会に還元することが重要です。あらゆる支出について常に熟考し、最適な選択をすることが、責任ある組織としての未来の社会への投資にもつながるのです。そして、社会にとって有益な組織であり続けるために、広く深く社会とつながり多様な形の互惠関係を築き、未来に引き継いでいくことも、組織の成長や新たな価値の創出につながります。

私たちの活動目的の一つに、人的資質の向上と啓発というものがあります。この対象は市民や社会変革のリーダー候補となる人材に加えて、運動を起こしていく会員個人も含むと考えます。私たちが託された資金から生み出す価値を最大化するため、各委員会が事業構築や例会構築のために調査研究した社会課題を会員個人にも深く共有し、学びの機会を充実させることが重要です。一人ひとりが地域のリーダーとして住み暮らす地域の現状や課題を認識することが、青年会議所としての活動の質を高めることとなります。

【効率的な意思決定と出会いの機会】

青年経済人である私たちは、現状に満足せず、慣習に疑問を抱き、常により良いものを追い求める組織であるべきです。そして情報管理、運動や運営の手続き、内部や外部とのコミュニケーション手段を自ら効率化して例を示すことで、会員相互の発展にも役立てることが出来ます。今こそ、変化を恐れず、成功例も失敗例も冷静に分析し、時代に即した新たな価値を生み出すときです。情報技術が進歩し、状況の変化や意思決定のスピードが速まっている現代においては、これまで以上に効率的な組織運営が求められます。

そうしたなかで、正確な意思疎通のために余分なプロセスを適正化し、時代へ適合させ、また組織の意思決定プロセスや情報共有における効率化、デジタル化を自ら進めることで、組織も会員個人も進化させていくことが重要です。

また、地域や国境を越えた青年会議所のつながりは、私たちに他では得られない出会いの機会を与えてくれます。その総合的な調整機関である日本青年会議所のことを知って、連携を強め、出会いの機会を最大限に享受することは、修練・奉仕・友情という三信条の効果を高めることにつながります。

【結びに】

「マネジメントが成功するためには、

アート（＝直観・ビジョン）

クラフト（＝経験）

サイエンス（＝分析・評価）

がすべて求められ、互いに補完し合わなければならない。」

ヘンリー・ミンツバーグ

経営学の大家はこう主張します。この内のどれか一つにでも特化してしまうと、アートの一辺倒は「ナルシスト型」、クラフト一辺倒は「退屈型」、サイエンス一辺倒は「計算型」のマネージャーになり、一つだけ欠けても問題が生じ、三つのバランスが均衡しすぎても無個性なマネージャーになってしまうとミンツバーグは警鐘を鳴らします。

私たちの運動においても経営と同じように、直観、経験、分析の全てが重要です。課題の背景と目的を認識し、自身の直観、専門家の経験、関連数値の分析によって課題解決への仮説を設定し、効果的な実行の手段を考える、そのプロセスに三つの要素からの個性が表現されます。幸いなことに、青年会議所ではその活動や交流を通して、この三つの要素を全て磨くことができるのです。

青年会議所には唯一無二の出会いがあります。社会的、商業的な背景を異にしながら、同じ地域を愛し、同じ志を抱く仲間との出会い。物理的な距離を超えて、地域や国の誇りを感じながら、その未来をともに考える仲間との出会い。連綿と続く歴史を紡ぎ、組織を退かれてからも愛情と誇りをもって指導していただく先輩との出会い。そして、その活動を通してつながる全ての市民、団体、企業、行政との出会い。この輪を広げていくことは即ち個人の成長につながり、組織の活性化につながり、地域社会の発展につながるのです。

私は青年会議所において3年間にわたり、3つの全国大会に関わってきました。北海道札幌大会は結果的に現地ではなくオンラインでの開催となりましたが、危機や変化に対応し、新しい大会の形を社会に示すことができました。また、そこに至る3年間で得られた、全国や全道の仲間との友情、そして事業を通して様々な地域や業界の人びととつながる、青年会議所にしかない出会い、そして、課題の調査にあたって自ら徹底的に手と足を使い、目と耳で確かめ、額を寄せ合って解決手法を議論し、実行計画を綿密に練っていく経験、これら全てが私の貴重な財産となっています。

青年だからこそ、一期一会の出会いを大切に、汗をかき困難に立ち向かいましょう。

その機会こそが生涯の財産となります。